

I 外国語・外国語活動 研究テーマ

自分の考えや気持ちを伝え合う活動を通して、外国語を用いたコミュニケーション能力を積極的に高めようとする子どもを育む学び

II 研究の重点

よりよいコミュニケーションにつながる省察のものさしを、子どもが使えるようにするための手立て

III 研究の実践

指導者：藤田 峻

1 6年 単元「My best summer vacation ～小学校生活1番の夏の思い出は？～」

2 成果と課題

成果

(1) 意図的な指名による、子ども同士が「やり取り」のモデルとなる場の設定

・本単元では、コミュニケーションに必要な言語材料について、仲間の学び方のよさを自分の学びに生かすことができるように、抽出ペアによるモデル提示の場を繰り返し設定した。特に、既習表現を活用してレポートの内容を付け加えたり話題を広げたりするなど、表現豊かにやり取りをしているペアの様子を全体で取り上げ、価値付けた。その結果、以下の姿が見られた。

○やり取りのよかった点として、「回答一つ一つに反応しているのがよいと思った。」「一つの話題についてたくさん質問しているので、すごく会話が広がっていてよいと思った。」などの具体的な視点が子どもから出され、一人一人が伝え合う内容や活用する既習表現、伝え方の工夫などの「学びのものさし」を更新する姿

(A児「I enjoyed shopping.」 B児「Oh,shopping! What did you buy?」 A児「I bought shoes.」 B児「Oh,shoes! What color?」 A児「White and red.」)

○「最初は聞き方が分からずやり取りが全然うまくいかなかったけれど、二人のやり取りを見てからスムーズに会話ができた。」など、子ども同士のモデルから内容面や言語面での新たな気付きを見だし、次の学びへつなげようとする子どもの姿

これらは、子ども自身が実際にやり取りをする中で、「どのように質問をしたり答えたりするとよいか」について、必要な言語材料が分からなかったり、自信がもてなかったりする状況であったからこそ、必要感のある学習活動になったものだと考えられる。このことから、教師によるモデル提示だけでなく、子ども同士がモデルとなる場を設定することで、見通しをもつことや自分のやり方を修正することにつながり、有効であったと考える。



【抽出ペアの意図的なモデル提示】

(2) 「やり取り」を広げるための、3人グループによる学習形態の工夫

・本単元では、その場で質問をしたり答えたりしてやり取りを広げることができるように、3人グループで「話す役」「聞く役」「見る役」に分かれ、役割を交代しながら学習を進めた。その際、見る役が「ここをもっと知りたかった」点をアドバイスしたり、やり取りのよかったと思った場面で、○カードを示したりできるようにした。その結果、子どもたちの振り返りからは、「オブザーバー（見る役）のときに、一番英語の使い方についてよく分かる役だと思った。」など、自らの学び方のよさを見つめ直す姿や、「分からないところは、グループの人が助けてくれた。」など、グループ内で相互に学びを支えている姿などが見られた。これらは、グループ内での役割を明確にしたことで、やり取りをするだけでなく、「見る役」を全員が行うことで、伝わりやすい会話に必要な情報が何であるかを客観的に見つめることにつながったものだと考えられる。このことから、役割を明確にして学習形態を工夫したことは有効であったと考える。



【役割分担を明確にしたやり取り】

課題

「学びのものさし」を用いて、自らの学びを深めていくための単元構想の工夫

・本単元では、過去の表現の仕方を知る活動を行った後に、夏の思い出について伝え合う学習過程であった。学習者にとって、必要性の実感が不十分なまま先立って言語材料を学習することは「主体的な学び」とは言えず、実際のやり取りで十分に活用できない場面が多く見られた。子どもたちが自分の考えや気持ちなど、伝えたい内容がある中で、必要となる言語材料に気付いたり、実際に使ったりすることができるような手立てを模索していきたい。

IV 外国語・外国語活動 1年次の成果と課題

成果1：子どもの思いや願いをコミュニケーション活動のゴールに据えた単元構想

成果2：子どもと教師でつくるルーブリックによる授業デザイン

課題：「学びのものさし」を用いて、自らの学びを深めていくための単元構想の工夫

IV 外国語・外国語活動 1年次の成果と課題

1 成果

(1) 子どもの思いや願いをコミュニケーション活動のゴールに据えた単元構想

子どもの中に、自己の学びを見つめる「ものさし」を生み出すためには、子どもの思いや願いを大切にしたいコミュニケーション活動のゴールを設定することが重要だと考える。

6年生「Let's think about our food.」の学習では、単元のゴールの設定を子どもに委ねることとし、どのようなことをしたいのか問いかけた。子どもたちからは、「教科書通りにオリジナルメニューを紹介するのではなく、グループごとに飲食店を開きたい。」「飲食店を開くなら売り上げを競うことで、紹介内容も更に工夫できそう。」「5年生のときに学習した注文の仕方を生かすことができそう。」など、生き生きと自分たちで学びを創り上げていこうとする姿が見られた。さらに、同時期に5年生「What would you like?」の買い物を題材に学習を進めていた下級生や、普段の学校生活で関わりのある先生方を招待し、「6C Mall」と称して異学年交流によるコミュニケーション活動の場を単元のゴールに設定した。

単元の序盤では、各グループで多くの人に購入してもらえそうなメニューや商品、PRする内容について考案するところから始まった。その後、単位時間毎の振り返りを基に、単元のゴールを達成するために必要なことを学級全体で考え学習活動を進めていった。特に、販売場面のシミュレーションを重ねながら、うまく伝えることのできない言語材料をグループや全体で共有したり、モデルのやり取りを見ながら必要とする表現の仕方に気付いたりするなどの活動を進める中で、伝え合う内容や活用する既習表現、伝え方の工夫などの「学びのものさし」を一人一人が更新していく姿が見られたことは成果である。



【異学年交流でのやり取りの様子】

昨年度までの研究の成果であった、自分たちで単元のゴールを設定することで、単元を通して学びへの主体性が持続することに加えて、コミュニケーションの目的意識・相手意識を明確にもち、「学びのものさし」を得たり更新したりしながら見通しをもって自らの学びを主体的に調整していく子どもを引き出す手立てとして、有効であったと考える。

(2) 子どもと教師でつくるルーブリックによる授業デザイン

学習到達度の評価基準となるルーブリックを、学習活動を進める中で子どもと共に作成し共有していくことも「学びのものさし」を生み出す手立てとして有効であったと考える。

6年生「My best summer vacation～小学校生活1番の夏の思い出は?～」の学習では、教師のSmall Talkによる演示や子ども同士のやり取りのモデルを示す中で、自分たちのやり取りに生かせることや、どのようなやり取りの姿が3段階(A・B・C)のA基準になっていくのかを考え共有する場を設け、明確な目標をもてるようにした。

	質問(聞く役)	応答(話す役)
A	相手の応答に対して、それに見合った質問をしている。	相手からの質問に情報を加えて応答している。(問いかけ・説明を加える等)
B	基本的な表現を用いて質問をしている。	相手からの質問に回答している。
C	質問をしていない。	相手からの質問に回答していない。

【子どもたちと共に作成したルーブリック】

これまでは、教師がルーブリックを一方的に作成し示していたが、子どもと教師でルーブリックを作成することで、単元のコミュニケーション活動を通して、子どもたちが自らの学びを見つめ直すときに用いる「学びのものさし」を得ることにつながったと考える。

2 課題 「学びのものさし」を用いて、自らの学びを深めていくための単元構想の工夫

6年生「My best summer vacation～小学校生活1番の夏の思い出は?～」の学習では、過去の表現の仕方を知る活動を行った後に、夏の思い出について伝え合う学習過程であった。学習者にとって、必要性の実感が不十分なまま先立って言語材料を学習することは「主体的な学び」とは言えず、実際のやり取りで十分に活用できない場面が多く見られた。子どもたちが自分の考えや気持ちなど、伝えたい内容がある中で、必要となる言語材料に気付いたり、実際に使ったりすることができるような手立てを模索していきたい。